

中小企業と金融

起業の断面

▷2

「我が社の事業が先日、衆には中高年男性だけでテレビで放映されました。まず、その映像を個人経営者、大企業の役員OB、公認会計士、弁護士ら職業も様々だ。性声に、ホールを埋めた約二百人の視線がスクリーンに集まる。」

東京・JR渋谷駅近くの投資育成ビル。八階で代表の井浦幸雄(61)に二カ月に一度、ベンチャー起業家と個人投資家(エンジェル)をつなぐ交流会が開かれている。起業家の持ち時間は一人二十五分。映像や図表など思い思いの手法で、事業の将来性を訴える。聴

「米国に大きく引き離された個人投資家のすそ野を広げたい」。元日銀マ

羽ばたくかエンジェル

ンの井浦は語る。成功して引退した起業家がエンジェルに転じる米

国。人脈を巡らし、目利き役となるベンチャーキャピタリストや大学教授らを通して有望な若者に目をかける。

「日本人は古来、知見も勇気も持ち合わせている」。

ベンチャーキャピタリストの村口和孝(44)に投資する。「組織に属は事務所を訪ねる若者に個人が投資の全責任を負う。覚悟をみせれば動いてくれる投資家はいる」

起業家の説明を熱心に聞く個人投資家たち(東京・渋谷)



「VC」最大手のジャフコから独立。主に個人投資家から約六十億円の資金を集めベンチャー企業となるVCへの評価は、

すそ野拡大 優遇策を

好意的なものばかりでないのも事実だ。

日本取締役協会(会長宮内義彦オリックス会長)の七月の会合。

「三社から出資を受け、頻繁に事業報告を求められ、しかも内容や形式はばらばら。専任の担当者を一置かざるを得なくなった」――あるベンチャー企業社長の発言に、自らも傘下にVCを抱える宮内は苦笑を浮かべた。「すぐに株式公開だけをせっついてく

る。銀行の方が親密につきあえる」。ベンチャー企業経営者からはそんな声も漏れる。

九〇年代初めのバブル崩壊と最近の情報技術(IT)バブル崩壊。投

資家でもあるバリュートリエンション社長の天井次夫(53)は「二度の乱高下で損失を被った人も多く、投資環境は決して良くない」と語る。欧米に比べ見劣りする税制優遇を拡充すべきだという。

日本のエンジェル税制は九七年の創設。徐々に改善されつつあるものの、当初は投資した株式の売却損が出て初めて他の株式譲渡益から控除できる内容。売買益が出た投資家しか恩恵がないなど使い勝手が悪く、利用者は六年間での二百七十八人にすぎない。

ただ、企業の収益管理が厳しくなるなかで、ふ化に時間のかかるベンチャー企業への投資活動を経営陣が我慢し続けられるかという難問が水面下には残っている。間接金融に依存し続けた日本の企業社会に真の投資家層が広がるか。視界はまだ十分に開けていない。

(敬称略)